「学生ボランティア団体活動体験レポート」

大学名	明星大学
団体名	明星大学文化会教育研究部
作成者（所属学部学科・氏名）	教育学部教育学科　藤田真帆

タイトル：今だからこそ私たちにできる活動を

私たち明星大学文化会教育研究部は、1965 年に設立された、教育系ボランティア団体だ。教育とはどのようなものかを理論的に研究し、実践的方面からも考察し追求することを目的に、活動を続けている。そのメインとなる具体的な活動内容として、大学近隣にある 2 つの子ども会の企画・運営と、学習会活動が挙げられる。子ども会は日野市を中心とした地域単位で構成されており、主に児童を対象としている。私たちは季節行事の準備や、イベント当日の進行を行う中で、年間を通じた関わりを持たせていただいている。学習会は教育や子どもに関する内容を中心に、各自で設定したテーマについて意見交換や考察をしたり、そこで得た知見を子ども会活動で生かしたりする。さらにこれらの活動に加え、外部の教育系団体との交流や、地域のボランティアセンター等から依頼をいただいた、イベントの参加も行っている。

これらの活動は、57 年間この団体を繋ぎ続けてくださった先輩方や、今現在所属している学生全員の力が揃うことで成り立っている。そしてその結晶が子どもたちの笑顔であり、地域の方々からの温かいお言葉だ。今年の夏に開催した地域の子ども向けの工作・縁日イベントでは、ありがたいことに参加されたお客様から「子どもがとても喜んでいました。これからもこのような企画を続けてほしいです。」という感謝のメールもいただくことができた。これは子ども会を運営する保護者様を始め、活動にお力添えしてくださる全ての方々との連携・協力のもと、子ども達に楽しんでもらうためには、子どもにとって実りのある行事にするにはどうしたらよいか、真剣に考えてきた成果だと思う。

今でこそボランティア活動の目的を掴み直し、その維持・継続に尽力していると言えるが、ここ数年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響による、大幅な活動制限に苦悩してきた。毎回子どもたちと直接触れ合うことが前提だった子ども会は、ほとんど中止されたほか、学生同士が対面で話し合うこともままならない日々が続いた。しかしそのような状況下だったからこそ、私たちはこの活動を続けたいという共通の思いを胸に、豊かな発想で臨機応変な対応を考える力を得た。例えば ZOOM で開催した子ども会のハロウィンパーティーでは、画面の共有機能を生かして絵本のストーリー仕立ての進行を試みたり、上半身のみを動かして楽しめるレクリエーションを考えたりした。また今年の 8 月に実施した一泊二日のサマーキャンプは、学生の宿泊ができない中で、参加学生を 1 日目と 2 日目に分けてプログラムを作成することによって、できるだけ長く子どもたちと生活を共にする時間を確保することができた。ある計画を実行するときは、たとえその前にどんなに念入りな準備を重ねたとしても、予測不能な事態が発生することもあるだろう。それは当日の天候や場所の状況、参加する人や周りの人々の様子など、絶対と言える確かなものが一つでも揃っていないのであれば、当然のことのように思う。私は大学を卒業して社会に出たとき求められることは、決められたことを完璧に実施する力ではなく、例外な場面で臨機応変な対応がとれる力だと考える。私たちは先の見えない事態に試行錯誤しながら立ち向かう中で、数々の対応力を身につけることができた。

さらに我々がボランティア活動を通して得たことのうち、最も大きいものが、同じ志を持つ仲間との間に生まれる達成感だ。私たちは子ども会活動や、地域でのイベント参加の企画や内容を、毎回部員全員で考えている。またイベントで行う工作、レクリエーションの準備、プレゼント作成等も、役割分担や、部活動実施日以外の時間を利用するなどして協力を重ねている。その結果、子どもたちの「楽しかった」という声や笑顔を直接見聞きしたり、会が終わった後の努力し尽くした顔を見合わせたりすると、何度でもやりがいを感じるのだ。今年は新しく入部した学生が多く、部活動としての規模も拡大した。その中で学生の人数が多くなればなるほど、情報の共有や全員の意識を統一することは難しく、1 人当たりの仕事の分量にも差が生じやすくなる。正直代表者数名が、部活動の企画運営をした方が、活動は楽になるかもしれない。だがそれでも私たちは、みんなで話し合いながら決めていくことを大切にしており、これからもそうしていきたいと思う。それはボランティアというのは、人同士の関わり合いによって、成り立っているものだからだ。一緒に活動する仲間のほか、支援してくださる地域の方々、子どもたちや保護者の方など多くの人と出会いながら、信頼関係を築き上げていく。そしてそれは自分ひとりだけの行動に委ねられるのではなく、特に子どもたちと過ごすうえでは、どの学生も活動に対する意識を揃えることが求められるために、責任があると考えている。だからこそボランティアを続けるには、1 人の意見も欠けることなく、時間がかかっても全員が良いと思う落としどころを見つける必要があることを、実感している。

このようにボランティア活動を通して得たものがある一方で、新たな課題にぶつかることも多い。新型コロナウイルス感染症拡大により様々な行事が中止されたことで、対面での子ども会活動が減った結果、子どもたちが公共機関の利用の仕方や、体育館での遊び方を身に付ける経験が少なくなったと感じることもある。また集団での活動に慣れていない子や、個に応じた配慮を必要とする子への対応も必要だと考えている。そのため学生や保護者の方との連携を図りながら、その子自身が楽しめる工夫を絶えず探していきたい。また学生側もイベントの企画や参加の機会が縮小したことで、ボランティア活動の在り方が分からなかったり、明星大学教育研究部としての引継ぎに不安を感じたりすることがある。確かに毎年絶えず活動を続け、子どもたちや地域の方々との関わりを守ってきたからこそ、代々維持し続けてきた伝統や良さもあるだろう。しかしちょうど今、「例年」を知っている世代の学生がいなくなろうとしている中で思うことは、今後も凄まじく進む社会や教育現場での変化により、これからは「例年は」「いつもなら」という考え方では通じなくなるかもしれないということだ。そこで私たちは、前の先輩達が残してくれた成功や失敗経験を学び、良いところはしっかりと受け継ぎながらも、「今」目の前に起きていることに目を向け、ベストを尽くそうと奮闘することが重要だと思う。

ボランティア活動というものは、強制ではない。それでもやると決めて行動を始めたのなら、人と人との間に大きな責任と信頼関係が生まれることになる。それでも私たちがこの活動を続ける理由は、ボランティアは「誰かのため」になる活動であると同時に、自分たちが受け取るものも大きいと感じているからだ。将来に生きる力や達成感、やりがい、そして子どもたちの笑顔。これらは全て、ボランティア活動という経験により得ることができた。また活動を通して、課題を見つけることも多い。今後ますます変化する時代において、状況に応じた一番良い対応を試行錯誤していきたい。そして活動の主体が次の世代へと移るときは、自分たちの沢山の経験を活動の手がかりとして残しながらも、新しい代の人々が一生懸命考えたことを全力で後押ししていきたい。それは今、この状況の中でこの活動を経験した私たちだからこそ、できることだと思う。